

第1回BOX-AiR新人賞受賞作、
いきなり掲載!!

人生の十字路に辻占^{ツツウラ}少女は佇む……。
吉が出るか？ 凶が出るか？

Fortune Girl

著=千石サクラ illustration=しらび



千石サクラ——Sengoku Sakura

1993年生まれ。鳥取の高校生。B型。講談社BOX新人賞「Talents」を二度受賞。

しらび——Shirabii

埼玉県在住のイラストレーター。近藤左弦『夜明けの死神』（角川書店）、うれま庄司『彼女を言い負かすのはたぶん無理』（PHP研究所)などの作品の表紙・挿画を務める。

[Life is free]

それは通り雨が過ぎるのとともにやってくる。

春は春雨。

夏は夕立。

秋は時雨。

冬は雪が混じって、雪時雨。

何ともなかった雑多な日常に、雨が降る。人々はみな急いで家路を走り、雨宿りをし、洗濯物を取り込む。

それはまるで、「日常」という罪穢れを洗い清めるかのようだった。しばらくはただ雨音だけが響く。

雨が上がるころ、路地は冷ややかで神妙な空気に包まれる。

そして辻には、女の子が立っている。彼女は仔猫の尻尾のように背筋を立て、神前に供えるような箱を抱えていた。

凜としたその姿は、誰かを待つようだ。

彼女に逢った人は、不思議な感覚を抱く。

そして変に気恥ずかしくなり、何事もなく通りすぎようとするらしい。しかし、

流れるような京言葉で——彼女はこう声をかける。

「辻占いかがです？」

——彼女に逢うと、誰もが幸せになれるのだという。
そういう噂。

第一話 愁いの姫

——終わった。

カッラキホタル
葛木蛭は、そう思った。

ある晩夏の夕方のことだ。蛭は授業を終え、恋人である式島聡シキシマサトシを探していた。

蛭は四月に入学したばかりである。大学キャンパスは広く、まだ慣れていない。それでも聡のいそうなところは、だいたい把握していた。校内を彷徨っていれば、ほぼ確実に聡のところまで辿り着ける。

聡はたいいてい授業をサボっていた。本当は今頃三年生なのだけど、出席日数が足りず、まだ二年だ。このままではもう一度留年してしまうだろう。

もう九月に入ったのに、まだまだじつとりと暑い。石畳には枯れた夏の花が散乱し、見えぬ蝉は寂しげな絶唱をいつまでも鳴らしている。

学園にありがちな、適当に造られた庭園を過ぎようとしたときだ。

校舎の中に、聡の姿を見た。一階の、確か使われていないはずの部屋だ。——何故そんなところにいるのだろう。

「おい、さーとーしーくーん！」

そう声をかけようとして——それは喉元で呑み込まれた。

聡が、誰かと仲睦まじそうに話している。

否哉イヤヤ——仲睦まじそうに、という感じではない。聡と話している相手は女だ。まるで王子

様とお姫様が話しているような、二人だけの空間がそこにはあった。それに割って入るのは、とても気がひけてしまう。

ふと、その雰囲気がふわりと浮く。

聡の顔が、彼女に近づいてゆく。

そして――。

蛍は、思わずバッグを落とした。

聡が、女と口付けをしていたのだ。

時が動き出したかのように、周囲で蝉が木魂する。

シンシンシンシンシン――。

――全てが終わってしまったのだ。そう思った。

冷静に考えれば、それは必ずしも蛍が失恋したことを示さない。しかし、蛍はどこまでも突き放されたような感覚を抱いている。

聡に対する怒りより、そこにいた女に深い嫉妬を覚える。

蛍はバッグを拾い上げ、きつとしてその場から去り行く。

早足に歩きつつ、井戸のような心の底から、耐え難い感情が奔流する。――我慢しようとも、覚えず、ボロボロと涙が出る。そして聡から充分離れたと思うと、往来にもかかわらず蛍は思いつきり叫んだ。

「聡のオ、ぶあかやろおおおおお――お！」

「――で」氷のように冷たい顔で遠藤は訊く。「何で私が呼び出されたわけ？」

「何で、って酷いよー！」

遠藤は蛍が大学に入ってから、初めて持った友達である。しかし「遠藤」と呼ばれていても、本名は遠藤ではない。何故かは知らないが、古くから「遠藤」と呼ばれているらしい。

蛍はケータイで遠藤を呼び出すなり、今あったことを話した。——都内の茶褐色セピアな喫茶店である。冷房がよく効き、外とは打って変わって涼しかった。遠藤は、何だか本気で怒ったような顔だ。

「だから、さんっざん、あんなタラシはやめとけって言ったじゃない」

「だって、まさか本当に浮気されるとは思ってたんだもん！ ちよつとは慰めてよー」

そう言い、蛍は顎をテーブルの縁に載せる。深く染められた茶髪がだらしなく垂れた。蛍は、「失恋」の痛みをどうにかして癒したかった。その甘えたような動作が、遠藤をいらつかせる。

「蛍のために言っとくけど——最初から式島は遊びのつもりだったのよ？ 他にもっといい男はいるんだし、思い切って別れちゃえば？」

遠藤は、見下したようにきつい言葉をかけた。いつになく彼女の言葉には、毒が含まれている。

聡と遠藤は同じ高校で、聡について色々な醜聞を知っていた。最初に蛍が聡と付き合うのだと知ったときから、彼女はやめておいたほうがいいと警告していたのだ。

「そ——そんなこと——できないもん」涙を流しながら、蛍は悔しそうな顔で力説する。

「私は聡君にとって、特別な存在なんだもん。聡君に一番似合うのは、私なんだから！ 聡君、そう言ってくれたんだから——」

遠藤の、息を呑む声が聞こえた。

しばらくして、彼女はとても厭そうな顔をする。

「どうしてそこまで蛍が自信をもてるのか、私には解らないわ。私は高校のとき、散々蛍みたいな女の子の泣きっ面を見てきたんだけど。——式島が、蛍を愛してるわけがないのに——」
「それは——」

そう言われると、蛍は弱い。

蛍は聡が、自分の「運命の人」なのだ と確信していた。けれどもその確信がどこから来るのか、蛍自身も解らないのだ。解っていたとしても、蛍は他人に説明するのが上手くない。色々かつたない思考をめぐらせ、蛍はこういう。

「——聡君、普段はガサツで分んないかもしれないけど、雰囲気のある明るいいひとなんだよ？ 私たちの関係は、ほんと上手くいっていたと思う。遊園地でデートとか、ベタなところが多かったけど——恋人みたいなことは一通りやった。そういったベタなところも、全部好き。聡君といるだけで、私は愉しかったな——。思い出の一つ一つが、私にとって特別なもの。聡君は、そんな「特別」を私に与えてくれる人だから——」

それを聞き、遠藤は呆れたようにこういう。

「それ、アイツが誰にでもする愛想だから」

「——え、嘘っ？」

「蛍みたく、上っ面に騙される人が多かったわ。男子の間では、女殺しの式島、なんて言われてたくらいなのよ？ あいつのムードに中てられたら、大抵の女は落ちる、って」

どこまでも意地悪そうな口調である。「私なんか高校時代から、ずーっと甘い言葉をかけられていたんだから。まあ、回避するのに苦労したけど。けれどそれだったら、蛍より私のほうが愛されてるって事かしらねー？」

蛍は、深いシヨックを受ける。

しかし、ここは意地を張ろうとした。遠藤の口調に腹が立ったのもあるが、引き下がれば本当に失恋してしまうような気がしたのだ。

「何よー。聡君、エンドーさんみたいな委員長タイプは好きじゃないって言ってたよ？ 私みたいな、か弱くて可愛らしーのが好きなんだってさ！ 長年付き合いがあるんなら、エンドーさんもよく解るんじゃないの？」

的を射た反論だったらしく、遠藤は何も言葉が出なかった。遠藤は意外そうな顔をしている。蛍は得意になって続けた。

「聡君、本当はもっと繊細なんだよ？ 何て言うか——自分にしか見せない顔を持つてる感じ。こういうところをこっそり見れちゃうのも、恋人である私のみの特権だ——って思うの」

遠藤の眉が、露骨にびくびくと震えだした。

「ま——まあ、たとえ蛍が愛されていたとしても、浮気されちゃ元も子もないわよね」

それを聞き、むしろ蛍の感情は高ぶる。

「けど私、負けない——」

——いつまでもうじうじしてはられないのだ。蛍は往生際の悪い女だった。このままでは、他の女に聡をとられてしまうかもしれない。だから開き直ってこういった。

「そもそも学校で誘うって、どういう神経した女なのよ！ 私が必ずこの手で、聡君から引き剥がしてやるわ！」

目には紅蓮の焰が燃えている。

急に大きな疲労感が遠藤を襲う。蛍に深い深い絶望を感じた。

——ほんと、どうしたらいいんだろ、この子。

彼女は聡から離れる気はないらしい。おろか、どんな手を使ってでも他人を蹴落とす覚悟

が出来ているというのだ。——遠藤はふうと息を吐いた。蛭がそこまで言うのなら、それは仕方ないことである。遠藤にもまた、別の考えがあった。

——たとえば蛭が聡を取り戻しても、幸せになれるという確証はどこにもないのに。

そのときだ。頭に浮かんだ「幸せ」の二文字が、場違いな言葉を連想させたのだろう。あるいは、この憂鬱な話を逸らしたいという願望が、無意識にあったのかもしれない。

「辻占にでも行き会えたら——」

それは、ほんの独り言だった。

「つじうら、って——？」

蛭は小首をかしげる。遠藤にとって、それはちよつと意外なことに思えた。「あれ、知らない？ 出会うと幸せになれる。『辻占少女』の噂——」

「どういう話？」

「結構有名な話なんだけど」と遠藤は前置きした。「雨上がりの人がいないとき、辻に女の子が立ってるんだって。特徴といった特徴はないらしいんだけど、不思議な感じのする女の子」

「特徴がないのに、どうしてそれだって判るのよ」

「出会ったら、あ、この子だ、って思うらしいよ？ で、その子が出会った人の運勢を占つてくれるわけ。それは絶対に外れなくて、尚且つ幸せになれるんだってさ」

「変なの。その子に逢った時点で幸せ確定なのに、占ったりするんだ」

その時蛭にとって、なぜか幸せという言葉がひどく空虚なものに感じられた。辻占少女の噂話が、あまりにも現実味を帯びていなかったせいだろうか——。あるいは、ちよつと沈鬱（ヘビ）な経験をした後だったからかもしれない。

絵空事で現実には解決できないのだ。

「確かに、そうかもね」頷いてから、遠藤は少しだけ考える。

「けどそれが幸せに至るための、通過儀礼ってヤツじゃないの？」

ご購入はこちらから

こちらは、試し読みです。続きは、こちらで購入できます。

■講談社BOX編集部が手がける電子雑誌「BOX-AiR」創刊！

「BOX-AiR」は、西尾維新氏の「化物語」シリーズなどで知られる講談社BOXと、各界の著名なクリエイターが個人として集まり作り上げられた電子書籍「AiR」、そして「新世紀エヴァンゲリオン」など多数のヒット作を手がけるスターチャイルドが、新しい才能発掘を目指して創刊した電子雑誌です。

＜アニメ化作品を発掘！！「BOX-AiR」の特徴＞

新しい才能の発掘と育成を目的としている点は従来の文芸雑誌と変わりありませんが、最大の特徴は掲載原稿の募集を公式サイトで行い、ひと月単位で選考を行った上で、掲載される点。

また、毎号スターチャイルド制作グループを交えて掲載作品のアニメーション化が検討され、連載が単行本1冊分掲載された作品については、講談社BOXから紙の書籍として単行本化されます。

BOX-AiR零号/講談社BOX-AiR

価格：350円

パプー版（パソコン・PDF・ePub）：<http://p.booklog.jp/book/18527>

iPhone・iPadアプリ版：<http://itunes.apple.com/jp/app/id415281243?mt=8>